

家族のなかの私

尽す喜び 尽される喜び

海老名香葉子



家族のなかの私
尽す喜び 尽される喜び

海老名香葉子

海竜社

著者略歴

海老名香葉子（えびな かよこ）

昭和八年（1933年）東京生まれ。昭和二十年三月の東京大空襲で兄一人を除き、一家六人を失う。昭和二十七年、落語家林家三平と結婚。昭和五十五年三平師匠没後も弟子林家こん平をはじめ、二十六人の弟子のおかみさんとして一門を守る。エッセイスト、テレビ出演、講演と活動は幅広く、著書に『ことしの牡丹はよい牡丹』（文春文庫）『うしろの正面だあれ』（金の星社）『姑うた様と』（講談社）『暮らしのかくし味』（二見書房）『泣いて笑ってがんばって』（廣済堂文庫）『私が受けた愛のしつけ』（海竜社）『あした天気になあれ』（朝日新聞社）、『暮らしのびっくり知恵袋』（光文社）、『野菜大好き』（家の光協会）などがある。長女美どり（峰竜太夫人）、次女泰葉（春風亭小朝夫人）、長男こぶ平（落語家）、次男いっ平（落語家）の二男二女の母。

家族のなかの私 尽す喜び尽される喜び

平成五年七月八日 第一刷発行

平成五年八月五日 第二刷発行

著者 海老名香葉子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四

電話 東京（〇三）三五四二—九六七一（代）

振替 東京一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1993, Kayoko Ebina, Printed in Japan

家族のなかの私
——
尽す喜び 尽される喜び
——
目次

大家族の中で暮らす幸せ

待ってました還暦……………8

生きている限り家族のために尽したい……………12

家のなかの音は煩わしいくらいがいい……………17

家はすべてを知っている……………20

ホッと幸福感^{しあわせ}じます……………24

家族の中で育てられた孝心……………28

母の縫った雑巾と父の目が見守ってくれた……………31

母の味、姑の味、幸せの味……………36

情をもっていれば情が返ってくる……………42

老いてこそその美しさがある

老いてこそその美しさがある……………48

ネンネばあちゃんが起きられた理由……………54

三世代仲よく同居の秘密は?……………57

与えられた命のときを心健やかに生きる……………60

生きがいがあるから生きられる……………	66
向老期なんてとんでもない……………	71
アニメのかよちゃんと現実のババちゃん……………	74
孫に返す……………	77
私の言い遣しておきたいこと……………	82
嫁、姑の仲は思えば思われる	
元気がきものを着ている……………	86
働き名人は休み名人……………	89
主婦業こそ私の生きがい……………	92
嫁姑の仲は思えば思われる……………	96
女の働き甲斐 喜び甲斐……………	100
暮れの買い物は浅草でなくちゃ始まらない……………	104
嫁姑、教え教えられ家事ノート……………	107
私の神さま仏さま……………	110
一杯のお茶の効用……………	115

形より心、こんな結婚式もある……………119

私を支える愛の教え、家族の絆

生きるための戦い……………124

祖母から母へ、私から孫へ伝える一本の帯……………128

家族のため、子供のために一生懸命尽す……………134

父ちゃんが一番偉い……………139

思い出の中の夏休み……………144

一滴の水も大切……………148

もう一度だけ母の声が聞きたい……………151

「もりそば二枚」の粋……………155

内弟子にしてこそ情が通う……………158

嫁と娘に伝えたい私の暮らしノート

料理上手は一等賞の妻……………164

無駄のない暮らし……………168

ご飯のおいしさは主婦の心と手加減……………	172
夏だからこそその気くばり、心くばり……………	175
うちの定番、てんぷらとおでん……………	178
贈り物、私の工夫……………	183
緑は私の幸せ色……………	187
私だけのちょっと小さな旅……………	190
親孝行の子を育てる……………	193
ありがとうの気持ちが募るとき……………	196
一番大事なことは心がきれいということ……………	200
あとがき……………	204

装画——いわさきちひろ

ブックデザイン——三田鷹司

大家族の中で暮らす幸せ

待ってました還暦

六十歳を目標に……

「私も八年生まれです」

「え、そうすると、もしかして、お母さん、赤いちゃんちゃんこですか」

「そォ、そうなんですよ」

これは先日、NTV『知ってるつもり』に出演したときのこと。テレビの録画どりの控室で関口宏さんとの、ほんのちょっとした会話です。

早くこいこいと思っていた、六十になりました。年をとって嬉しいのです。

昔、昔から、赤いちゃんちゃんこを着て帽子を被^{かぶ}った人を偉い！ と思って見つめていました。なぜか偉い人の印象が強かったのです。だからといって特別、子供達に赤い帽子やちゃんちゃんこを着せられるなんて、

「いやな、こったい！」なのです。

赤いのを着て拍手で祝ってもらう自分を想像すると、何だか変ですし嫌なのです。でも六十の、歴れっきとしたおばあさんになりたいのです。

要するに、私は年をとって偉い人だよ、と思いたいのだと自分の心を解明しました。

こういう心の持ち主はきつと意地悪ババアで長生きをするのだろうとも思います。

なぜこんなふうを考えるようになったのでしょうか。一つには、私は四十六歳で未亡人と呼ばれ、そして十三年、俄然私は男になっていたのです。

涙を流すのも憚り、子供を叱咤しかし、どんなに大勢私にぶらさがろうとも、びくともせぬ腕をもちたい、脛すねをもちたい、その目標の年齢が六十だったのです。

六十歳、これからが面白い

そして、六十になりました。

酉年の年女。振り返って、そろそろ女になりたいと思ったのです。

手始めにセーターです。先日来嫁に、

「お母さん、セーター毛玉だらけ」と言われ、取り替えようと引き出しをあけたら、黒とグレー、そして全部すぐに毛玉だらけになりそうなものばかり。

「そいじゃ、ひとつ、新しいやつを」

そう思いながらもお店を覗く時間がなく、デパートへも行けず（なのに、ちゃんと孫をお風呂に入れてます）。しかたなし、買いたての上手の嫁にバーゲン情報を聞き、

「ゆっちゃん、私、六十。今年から若返りたいの。派手なセーター、みつけてきてよ」
そして、五時間後、袋を抱えて帰った嫁の差し出したセーターは、ベージュと落ち着いた藤色。

「よく似合うわ、お母さん、若返ってみえるウ」

丁度居合わせた娘は、

「珍しい色、着るのね。シックでいいわ」

誉め言葉も嬉しいし、色も良かった。でも内心、派手派手のケバケバを買ってくるかな、きたときはきちんとうけとめ、それを着るか、と覚悟はしていたのですが。

やっぱり、それぞれの家庭の分というものがあると、またまた考え、これで良かったと安心したのです。

大人になったり子供になったり、男になったり女になったり、先生だったり生徒だったり。還暦、本卦がえりというけれど、愚に返るほど老いもせず、さりとて飛んだり跳ねたりは三歳児にも劣り、かといって、若者には作れなかった作れっこない味自慢の料理、漬けものができ、「さすが、おふくろ」と喜ばれ、低い鼻を高くしながらも耳は遠くなり、

でも勘で聞こえることを会得し、目は老眼鏡で充分とは言え、先日はかけているめがねを探す失態をしてしまい……。

本当に、ややっこしいばあさんになりましたが、でも、これでいいのです。

面白い。これから先、どう自分が変わってゆくのか楽しみです。

でも、せっせとした気持ちだけは持ち続けたいと思うのです。

生きている限り家族のために尽したい

おばあちゃんならではのゆとり

「まあ、この寒いのに靴下も穿かずに大丈夫なの？」

と言うだけで、特別孫に靴下を穿かせようとは思わない、そんなおばあちゃんの私です。自分の子だったら、風邪ひいたらと思って穿かせただろうことを、孫となるとたいして気にもとめず目につくことだけを言うのです。

ときとしては優しい嫁であるママが孫を、

「テーブルに乗っちゃ駄目って言ったでしょう。あづちゃん、どうして分からないんです」「ノウ！」と叩いている。

私はかわいそうに、そうまでしなくてもいいのにと思いつつも、見ないふり聞かないふりをすることもあるし、ときとして、

「こわい、こわい」

と言いながら、抱いてやることもある。

「バァーバは、優しいのね」

と目をうるますママは、自分の愛しい子をこの世で誰よりも大事に思ってくれるのがおばあちゃんの私だと思っているのだと思う。でも私は将来とか先々のことより今の今を可愛がってしまうし、心を満たしてあげようと思う。

「歯を磨いたんですから、チョコレートあげないでくださいね」って言われても、

「内緒、内緒」とあげてしまう。

「あづちゃん、どこで内緒なんて言葉覚えたのかしら。変ねえ」

そんなに子育てがなじがらめに考えなくてもいいのよ、と言っているけれど、私もその最中は夢中だった。そして姑にそう言われた。

何人も子供を育て、年をとったら余裕ができて、子育てもゆとりをもった目で見られるようになりました。

そしたら子供達、孫達の可愛いなんの。やっとゆとりが訪れたこの頃なのです。

「バァバ、オヤチュミナチャイ」

小さな孫がお手々についておやすみのごあいさつをして、部屋に引き上げて行きました。ああ、一日が終わったなあ、と思いながらも、親達大人達はそれぞれの仕事が続いたり、

テレビを見て楽しんだりです。

今日、嫁の有希子と私とで話をしたのです。

「ねえ、ゆっ子ちゃん。昔のいいことっていっぱいあると思うよね」

「そう思う、お母さん。いろんなこと教えといてくださいね。それをあづき（孫）にも教えて伝えときたいと思うの。お母さんが死なないうちにね……」

「ハハハハ……」

孝心を持つ子に育てる

ところで何を教えたものかと考えたのです。まずは暮らしのこと。

衣についても夏の過ごしやすさ、冬の暖かさ、今は不便だと思う和服についても利用の方法はたくさんあるし、祖母や母が着たものを私が袖を通す、その思いは郷愁というより、振り返る情とか胸熱くなる思いに駆られるのです。

家もそうです。柱の傷もたくさんに増えました。住まいいいように変わりつつあります。昔、階段の手すり、すべり止めなど子供や姑が落ちないように工夫したものは自然な形で、今は姑になった私や孫に役立っています。

食については、そもそも作る場所の名称もお勝手、台所、キッチンと変わってしまいま